佐倉新町にあった大量館のお話

現在の岡山食堂駐車場はかつてブラザーミシン佐倉店がありました。その前は「**大量館**」という**映画館**があったのです。明治時代、ここには水戸屋という料理屋のほか３軒ばかり住い家がありましたが明治 29 年の２月大火で全焼、空き地となっていました。仲町の大木下駄屋が桐材の置き場に使っていましたが大正になると千葉吾妻町の羽衣館主がここに映画の常設館を作り大正２年 10 月から上映を始めました。当時としては映画の上映は珍しいことで町中はもちろん近郷の若者たちにも受けて人気は上々、休日ともなると外出した兵士などで満員でありました。大正７年に**仲町の大野量助さん**が買い取ってその名も**大量館**と改めました。大野量助さんは大木屋の店主。映画上映ばかりでなく時には政談演説の会場、またある時は芝居の興行浪曲名人会や催物も多数を極めていました。当時大木屋が連隊に出入りしていた関係で佐倉連隊長**林銑十郎(のちの内閣総理大臣)**が名付け親と量助さんが言っていたそうです。大正から昭和にかけて大木屋が繁栄しお正月、大掛かりな大木屋の初荷風景は有名だったそうです。開業当時の写真を大木屋さんからお借りしました。２枚目に掲載です。どうぞご覧ください。

ドラゴンへの階段 第⑮回

《エッセイ版》心技体の磨き方①

佐藤 洋祐

皆様、こんにちは！5年前の今頃、ニューヨークから再び日本に居を移したばかりの頃。海外ツアーを終えて空港から新居に向かう道すがら、「なんていう空気の潤いだろう。こんな国はほかにない、日本は水の国だなあ・・・」、そんな風に思ったことを憶えています。1年も半分が過ぎたこの時期、梅雨から初夏にかけて、いつもそんな感慨に耽ります。

おかげ様で「日本レコード大賞を狙うぞ！」という目標に向け充実した毎日を過ごしておりますが、今回の連載からしばらくの間、私の音楽その他の修練の方法について触れさせていただきたい、ということを前回の終わりにふれました。

今世の中は人同士の接触をできるだけ控えよう、という時。私は人との関係を生きてまいりましたし、それはこれからも変わらないのですが、今この状況はそれをある程度に止めなければなりません。ですが私はもともと一人の時間、自分と向き合う時間が好きな人間で、時間があれば音楽の練習を楽しんでいますし、他にも1時間ほどの体操を10年ほどほぼ欠かさず行っており、大切な日課そして毎日の喜びとなっています。こういった、ある意味、人と人とをつなぐための大事な「道具」である音楽や楽器、そして自分の体に磨きをかけたり造詣を深めたりするための独りの作業には、一切制限はかかっていません。

レコード大賞への3か年計画の2年目、これを元より自分自身と自分の「道具」の見直しに充てようと計画していた私でしたので、その通り毎日を忙しく元気に過ごしております。

挿絵 TAKAKO

皆様におかれましても、お一人またはご家族とお過ごしになる時間が通常より多くなる日々の中で、この状況ならではの楽しみを追及されたり、また新しい技術や知識などを習得しようという際に、これから連載させていただく内容をご覧になって、「へえ、そんな風に考える人もいるんだ」とか、「そこは私と違うな」とか、そんなことをお感じ頂けたらと幸いと存じます。つまらない者の浅はかな書き連ねですが、よろしければお付き合いください。

さて、日本には書道、華道、茶道、剣道など、「道」と名の付く手習い事が多くあります。これらはその技術を身に付けるだけでなく、習得の過程を通じて人生について知り、生きる知恵を学ぶ一つの「道」です。それらを学ぶことの目的がより豊かな人生を生きることであり、またその「道」を進むことがより良い人生を生きる知恵を得ることにつながるのです。私の場合はサックス、クラリネット、フルート、ピアノ、ギターなどの楽器、歌などを通して音楽に関わっていますが、これらの「道具」たちは私の選んだ「道」に「具（そな）」えるために必要なものたち。それらを一生をかけて習得し、同時にその過程を通じて幸せに生きる知恵を学びたいと思っています。そんな一生モノの「音楽道」についてのお話です！

さあ、次の連載からは、私の具体的な音楽の修練の方法についてお話しさせていただきたいと思います。その日まで、皆様がどうかお健やかに実りの多き日を過ごされますことを。

佐藤洋祐（サトウ ヨウスケ）

ジャズミュージシャン。サックス奏者としてグラミー賞を2度受賞、ノミネートは4度。海外での活躍で世界的に高い評価を得た。その後2015年末千葉県に住まいを移し現在に至る。2019年より日本の歌を唄うシンガーとしても活動を開始。